

今回のESDのひろばは、前回につづき「身近なESD」をテーマにお話ししたいと思います。前回までのお話を簡単におさらいすると、「少年期や青年期以降には、認知的能力と非認知的能力（社会情緒的スキル）の調和がたいせつで、非認知的能力は乳幼児期から育まれます。そして、世界の課題は複雑でそれを解決するには、そういった資質や能力がたいせつなんですよ」ってお話しでした。

じゃあ、どうやったら、非認知な・ん・と・か・が育つの？

はい、ありがとうございます。やはりその基になるのは愛着形成だそうです。親と一緒にいるときに、しっかり関わりを持ってもらうことなのでしょうね。たくさん抱きしめてもらえたり、お膝のうえでたくさん絵本を読んでもらえたり、たくさん話しかけてもらえたり、ぐじゅぐじゅの時も見放さず付きあってもらえたり、いっしょに泣いたり、それでも好きだよって言ってもらえたり。そんな日常のことが、その子の将来を育てているんですね。



それじゃあ、もう少し大きくなってきたら？

そうですね。ひとりで遊べるようになってくると、自然のある場所で、たくさん遊ばせることがいいようですね。自然というのは天候によって、季節によって、景色が違いますよね。あれがいいらしいです。まあよく、専門家とかは多様性とか有機的なんて言い方したりしてますけど。そういう中で、こどもの遊ぶ力にまかせて遊ばせるといいです。私たちって、ついつい「〇〇ちゃん、これでお山を作ってみたら、、トンネル掘ってみたら、、」なんて、言いがちなんですけど、危険を及ぼすとか、道徳上よくないってこと以外は、見守ってあげると、子ども達は研究者なので、いろいろな実験が始まり、失敗してはまた繰り返し、そしてある時「やった！できた！」なんて、こどもにとっては世紀の大発見があって、こんなところから、自尊心、自信、創造力、想像力、粘り強さなんてのができてくるんですね。共感したり、ほめたりするのは良いですよ。でも、こんな風に言ってますが、そんなにうまくはいきません。最初なんか、ひとりで遊べないですし、ようやく遊びだしても、単純な繰り返しで、なかなか発展していきません。だからこそ、子どもには沢山の遊び込む時間が必要なんでしょうね。もちろん、遊びだけでなく、大人との関わりもたいせつですけどね。そんな、こんなで、身近にできるESDがありますよ、というお話しでした。



なんだか、余白が多くない？

こころの余裕を表現してみました (;^_^A

子どもは、批判されて育つと 人を責めることを学ぶ。

子どもは、憎しみの中で育つと 人と争うことを学ぶ。

子どもは、恐怖の中で育つと おどおどした小心者になる。

子どもは、憐みを受けて育つと 自分を可哀そうだと思うようになる。

子どもは、馬鹿にされて育つと 自分を表現できないようになる。

子どもは、嫉妬のなかで育つと 人をねたむようになる。

子どもは、引け目を感じながら育つと 罪悪感を持つようになる。

子どもは、正直さと公平さを見て育つと 真実と正義を学ぶ。

子どもは、励まされて育つと 自信を持つようになる。

子どもは、ほめられて育つと 人に感謝するようになる。

子どもは、存在を認められて育つと 自分が好きになる。

子どもは、努力を認められて育つと 目標を持つようになる。

子どもは、皆で分け合うのを見て育つと 人に分け与えるようになる。

子どもは、静かな落ち着いた様子の中で育つと 平和な心を持つようになる。

子どもは、安心感を与えられて育つと 自分や人を信じるようになる。

子どもは、親しみに満ちた雰囲気の中で育つと 生きることはたのしいことだと知る。

子どもは、まわりから受け入れられて育つと 世界中が愛で溢れていることを知る。